

国際ミツバチ研究協会



雑誌紹介

Bee World 78巻1号(1997)には4編の論文が寄せられている。

Delaplane は「養蜂家のための実用科学—ハチミツ増産のための蜂群管理法」と題して、より多くの蜜をとるためには管理蜂群数、巣枠の大きさ、女王蜂の質、コロニー内の蜂の密度をどうするとよいのかアドバイスをしている。

Rao and Lakshmi はインドの乾燥地帯の蜜源植物である「アフリカミルクツリー」*Synadenium grantii* を紹介している。この植物の形態や植生、花蜜や花粉の分析結果などが詳しくまとめられている。トウヨウミツバチはこの植物の花蜜を集めるときには、分泌されて蜜腺上で結晶した糖が一度水に溶けたものを集めるのだという。また、蜂がこの花に向かう際に近くで水を集めるのが観察されており、その水で結晶を解かすのではないかと筆者は推測している。

Watkins は「抵抗性と養蜂業との関わり」と題し、ミツバチヘギイタダニ *Varroa jacobsoni* の防除用のアピスタンに対して、ダニが抵抗性を獲得してしまう問題について論じている。抵抗性のダニが出現する仕組みや、正しく薬剤を使用することでいかに抵抗性獲得を防ぐべきか、その方法についても述べられている。

Wongsiri et al. は「タイにおけるクロコミツバチ *Apis andreniformis* とコミツバチ *A. florea* の生態の比較」の中で、タイにおいて同所的に生息する小型のミツバチ2種の比較を行っている。比較項目は、分布域、体色、刺針や舌、雄の内陰茎等の形態や、また雄蜂や処女王蜂の行動、営巣場所の好みや巣の形、防衛行動、逃去行動等である。

Journal of Apicultural Research 35巻

3/4号(1996)には8編の論文が寄せられている。

Quezada-Euan et al. は、「アフリカミツバチのメキシコ、ユカタンにおける分布域の拡大について」の中で、メキシコ南東部に位置するユカタン州に1987年に初めて現われたアフリカミツバチを州内15か所のポイントで調査した。その結果、1990~1994年にかけて、飼育蜂群のうちの52%がアフリカ蜂化し、この割合でアフリカ蜂化が進むと1997年半ばにはすべての蜂がアフリカ蜂化してしまうだろうと予想している。ところが、52%がアフリカ蜂化した1994年においても、ハチミツの生産量は低下しなかったと報告している。

Redmond and Plowright は、「マルハナバチの再訪花行動と、花の配列や地形的目標物との関係について」という論文でマルハナバチ *Bombus impatiens* は花を探すコストを減らすためある目印を見つけたり、花の並び方を記憶しておき再度の訪花に役立てていることを述べている。花と営巣地の間を飛ばせて行う実験と、歩かせて行う実験で示している。

Kerkvliet は、「ハチミツ中の過酸化水素濃度の測定法およびヒドロキシメチルフルフラール(HMF)含有量との関係」と題して、種々のハチミツサンプルの過酸化水素濃度を測定し、その保存状態などが濃度と関連があるかどうかを調べている。過酸化水素濃度が高いハチミツでは、HMF含量が高くジアスターゼ活性が低い傾向にあり、またビタミンCの含有量が高いものでは過酸化水素の生成は低かった。

Loper et al. の「セイヨウミツバチ女王蜂の大あご腺フェロモンの雄蜂誘引性」についての短報は、女王蜂の大あご腺のフェロモン、9-ODA および処女王の抽出物が雄蜂を誘引し、交尾行動を解発させることができたとしている。またメチルパラヒドロキシベンゼンやホモヴァニルアルコールなどは単独では活性がないが9-ODAの誘引効果を増幅させることができるようであった。(関原 幹生)